嫩髪姹物語

二

へ遠13
1298
2

1298
2

蟠龍
垂水

嫩髪蛇物語巻之二

江戸　全亭主人戯編

第三回　老人の竹杖　在世の面影

爰に相摸國足柄山に鎮齋祭まる。足柄明神と伝へ〜御神も往昔狩する人在り。妻に離れ悲み止時なし〜。其妻死する時に一の鏡を与へ〜いはく。〜吾を墓ひの事あ〜ば此鏡を見よ〜と。遂に空く成ぬ。斯く其教授の如く墓ひ葬ぶ妻の摸りく〜と鏡に移りく。生る時の如〜なり。後其鏡を祭りく神とふ〜。鏡の在〜所を。あひうものなし。

相摸国と号〜る。古くものひ伝へく〜神徳灼然なれば。此處を過る旅人も更なり。此邊の人等總く歩行をたまび。家のうへとび祈るも。却説彼垂氷は母小磯が病を祈らんとなるに公こう夜更吾家と忍び出て。新る雪の夜も厭ひで赤裸にて足柄山にたどり〜。足柄明神の御社に詣でんとも。總く此ったり。八重山四方に連なる。人家絶る所なく。殊更嶮岨の深山踏られば寒雪膚を刺て針の如く。風雪霜を撃て剣に等きも更に顧ず。其夜の丑に近き頃彼明神の御社の社檀の下に走せ着ぬ。御垣に漂へ〜御手洗の柄杓も氷に閉られ。雪に埋まる動なと。小石拾ひく打碎き。漸々水に口漱ぎ頭に浴く。廣前に額突つも祈りけるに。希ひくは童子と。憐みひく吾母の病愈〜そこびゆと。華表の

下に幾返も。返りてゝ又〻拜む。斯る孝子の真心を。ゐぐら納受のゐるまし。折〻烈〻たる雪風の颯と吹来るに身も寒え。神門の下に吹倒され。其侭息を絶てげり。憐むべし斯る孝子。今足拵の山中の御垣の雪に埋まる。消ん命の真夜中に。一人更に無りけも。折〻も片瀬を一筋に。たゞ足跡を慕ひて。孫を案ずる心より。降積雪の深山路を測測と足拵の社の下に到着る。ゐまだ小き足跡の社の下より神門まで往返せり。雪の跡はたゞるゐれば御垣の内に入〻んと堆く降積雪に躓きて。力も弱き老の身の。動と倒れ音と共に雪の下より何やらん。蠢く様子に打驚き。狐狸の巣窟か。雪の上にと懼れ〻。起んとすれど最さへ任せぬ老の身の。冷寒える手足ぶるへ〻叫ぶ。身を悶

ゆえに雪間より。頭を出る童髪唐輪に結ひ項に。侘〻たる孫の容躰見るより其まゝ懐き。雪を拂へば裸身は。寒えく現世の人るまで。細き息の〻通へども言葉も出さで泣もせで。片瀬は周章て。吾懐を押屈げ。肌身に添く暖めんと。懐き入まゝ徒倚く。喘息つゝ御社の軒端に入りく様々に暖める。肌も老の身も。火氣も薄くくとぞ。如何にせまゝと猶豫不定。藥も非ず憑むべき。人影も見ぬ山中に。共に命も絶ゐんと。寒え〻肌を抱き。歎き侘るぞ哀れる。折も社に人音〻く。戸を押ひきえ出る。形勢に片瀬うち驚き。顧るまで年の頃二十歳余に成る法師の其容躰賤〻かゝぐ身に法衣をうち纏ひ。頭陀打〻〻ぐ走り出。斯る様子をうかゝくゐる。何處の者か知ら

まひど。稚きもの斯なりの雪の寒さ〜形勢いと哀なる事なりと。御垣の外面の立ち出が頭陀嚢なる器を取りて自が尿を濾し込いて水を汲来り。光景なつ持来りく杜口なる稚児が口を開きく呑そまぶ喉の納し形勢なまぶ寒さ〜ものの焚火のて。暖るまいそとみまとそ雪の陰なる枯枝を拾ひ集めく火打を取出し。社檀の下の焚付まぶ火いく炎々と焔なる。片瀬を悦び懐きてる垂氷が身中と左右とて。暖めねまぶ暫しく。垂氷を頻く目を見ひき。祖母さる寂早嗜々と左見右見しく ひけまぶ片瀬を大きの悦びく。夢の夢見しの地しの。法師の向ひいひけるの何なる聖の在まらん。不測慈愛を蒙りく。童の斯も蘇りねと涙ぶぐく畏み言へば法師を咲さまぶ今童の呑なし神水へ已ヨ年の

勤行めて。修法なしける加持水なれが頻の命を救ひしなり。是も前世の縁なるまし。斯る岐の不意も汝等の往合く。童が命を助けしも已が修行の本意なりと。言ひしの流石の容躰。殊勝げのえの法師の向ひく。自等母子ハ足拐の禁の近き井出の里の住る者候が先つ頃なる渠が母の。強く病るを祈らんとく。稚きもの裸詣更の其とも知ぐざりしが。何處の往しる稚児の夜の更るまで帰らぬ。尋ねく出しの背戸口の脱捨置しの缺掖衣。見ハいるのと不審つ。小き童が足の跡雪の付しを慕ひつ。問へば足拐明神の山邊をさしく越え往し。様子の扨ひと思ひ。跡追なりて来りしの神門の下の躓て。轉べば孫が雪の中の倒まく在し其が上の落重なりく打驚きの人を尋ねる

稚児の裸るぐるふ雪の中ふ悶倒くて在しゆえ。社の前ふ率て来り。双抱まれど詮ふき衣。尊き聖の恵ゆく。命救る畏さと。再拝ちまぞ理る。法師いるふ已ふ見よう。喜瀬川の宿ふ到まるのゆれば。共ふ送アく得させんと。ゆを片瀬ゆ赤しと。垂氷を肌ふ背負ひつ。そやと共ふうち連て。さしのふ深き雪の中を。喘息々々く凍けり。夜八疾四交の程過く。暁ちゆ遠寺の鐘の。響く比及漸々と。井出の里ゆぞ帰ける。門音信て家ふ入り。法師も俱ふ伴ひ入る。童ふ暑めうち暑せろ。小磯が枕ふ近著て。一十始終を話説ふ。小磯ゆ枕を打撫ば。泪ぐるふ法師ふ向ひ。吾児が命を救ひ。聖の恵の畏さゆ。是く死まも忘までと。いひしゆ。禍の中ぐらとて成ぬと。後ゆぞ慮ひ知らまけ。小磯ゆ垂氷が手を採く。

稚きゆして斯までも母をゆひく此雪ふ裸詣の願支を。其とも知ぬを病母を。斯打捨ての夜遊びと。恨ましうしふ愚さと。吾子ゆるぐるも孝行を。神の憐ゆ賜ひて。斯る聖ふ救ら。斯く戻アし嬉しさよ。自ハ厚き衾着て。家ふ在ぐふゆふ応ふ。夜深き雪ふ稚きが裸まうでふ八重山路こえて往しさだうふゆふいうゆの入り法ふん心地ハ何ゆと楽じつ。問へを垂氷ハ苔して。母さるさて宜へ。吾身ゆさるぐ苦しとも。ゆぐ詣し神垣ふ百度参アを神門ゆで。往返しつ其後ゆ知ぬでありしが心著く。人まぞ吾身を祖母さるの懐きゆひく居ゆを。偖ゆ楽ゆて祖母さるの自を迎へふ来さやひしと。ゆひしゆふ員ハ。家ふ帰ゆく。着衣を今着く人れば暖ふ。いと噌々侍るうり。母さるいふ在ゆと。問へを自も胥うふいと快しゆふり

とゆへを法師も居寄たゝ。病を訪ひく在けるに折ゝ片瀬と厨に入りく。暫しとゝろ立出く。署預粥を煮く持来る。法師に居くゝひける。斯る山家の饗応と。ゆゝしかりんのめるゝ。寒さ凌ぎに食ゆゝとゆへを法師も打悦び是を聞くく夜を明しに已を箱根の山奥に住める者ゆく此ところ折々過る者なゝ又訪べしとゆへ捨く。別を成告てぞ立出る。母子の名残を惜み。心の中に思ひける。箱根にゝと宜へゝ。塞の河原に在を。地蔵菩薩の現ゆひ。稚児を憐みく。救ひあゝのゝゝと。跡見送くく掌を合せ。ゝ拜つ別を〻り。正是今此處を立出ゝ。件の法師を衆生濟度の善知職秋且は破戒の悪僧なる。其を今既を説分べ。且説相州箱根の山奥に一宇の禅林ありけり。和尚を蟠龍と呼びく。北条義時が所縁ある僧ゆく。元来鎌

倉の武士なりしが。生質邪曲なるものゆく。そのゝく昼夜酒色に溺れ善ゝらぬ所業のく重なりけゝ遂に罪せらるべを。北条義時の計らひとして。薙髪せさせ。鬼角と命を助け遣はし此寺の住持とゝのゝけり。然るに去る建元四年五月朔日の夜寺中大に震動ゝ。夜半の比及空中ゝり。いゝる物とゝ墮しゝけん廣庭の方に地響して。雷の墮しゝ如きの音ぞきゝけり。されど寺内の者共を震ひ懼を出るゝて居くゝり。夜明て後に和尚諸共を出く。夜半の光景を問へゝ其丈廿尋余りなる大蛇の軀が庭中に蟠りてぞ死て有ける。是彼伊東が崎ゆく。依太が射害き大蛇の軀を。傍の谷に投落なりが其夜谷ゝり吹發き。颯ゆて巻あげしが回りく夜半頃爰の庭ゆぞ墮なるあり。寺中の者等を立

驚き。左右せん右と詞をかけるを和尚墻籠にくくりつけるを。此の斯て捨置
るべ。皮肉腐るまく臭うしんさそをいつゆも詮さぐるうしんされど斯る物を。
薬賈商人などゐんせてしんゐへ必用ある物をもとめと。和尚を従者を
走らしむく。鎌倉なる薬店の亭主を呼来くに見とがめれば亭主がいへ
ら。斯る物を製しのて貯ふるに已等ら活業ゆそ仕れど是しう鎌倉
まで人の力を借せ。家ゐ持往乾かうし。薬とるさんまでも多くの費
用も懸りいるれば僅の價めもゆで已申受ゆひるんとゆを和尚いるもも。
拾ゆけうと熟きけ五さくそとく商人を銀五文目を出し。蛇の軀を贖ひ
得く。縄のそ見を括せとせ。人夫等を雇ひ擔さを持く太けり。和尚い有て
禍と成ねべ物と銀五文目ゐ代うしそ打悦び寺中の者等を呼ひて其

夜を酒盛ゐ。夜更るまでどよく合く打臥うしが。其夜和尚の夢ゐ。
彼大蛇の来りく。和尚の頸を。七重八重ゆそ巻うるゐ悪と叫びつ夢覚
しが流るまで身ハ汗ゐるりく。暁方くう發熱し。病とるやを臥うしが。
程経く快くを成うけるが不測るゐ和尚が意夫うう自然と意
太し昔ゐを返う。酒色の念慮頻ゐ動き。彼大磯ゐ通ひ初め。後い廓
ゐ入浸せく。銅鑼を鼓のゝ佛家の常。酒を骨都々飲ばそ。盤若湯と
を呼るれと。懸らぬ魅の幡天蓋項く物い蛸看婦人ゐ物を貰ゐとも。
多の無き下戸ゐ生るをと。在と有らまゐ現をぬうゐ。常ゐ迷ひの雲の
中ゐ悟道見生しく。舞児が音楽ゐ心耳を澄し。三重褥の上ゐ結跏趺
坐しく。散蓮花ゐ魚肉を已ゐを郷思とうし。是を上品上生の樂とせれば。

彼兼言の法問に背く叩くまでも未本来無一物と對する事與なぞ。
されば寺中の佛具をば揚代の為に引取らまし。臺坐後光を失ふとの祟
更に世の塵をも忘れざまでに所化僧らもいつしか下山して。散々に落行けまし。
後々溢者等の集まり所となりぬ。和尚尚もこりぬに先頃より又
喜瀬川の里なる折鶴とかくる遊女に許に通ひけるが。今日も雪の降るも
厭ひなく立出でうしろに此足拵の山路にかかり。思の外に深きまに明神の御
社に。あらぬ雪の晴るを待んと立入るに。黄昏ちかく成るに雪もいよ
よ頻まに流石に法師も心の悩に不意も足を止め。爰に一夜を明さんと
真眠折りて。彼片瀬等に出合く寒えて垂氷を抱き。渠等を家に
見送りて少しの善事をなすとのべども。病る小磯が容貌年いさら夾過

まで。雪に撓める青柳の春の色香を含める姿に心殘して立出でが
可愛とおもふの稚児に飽きを恩を著せつまびらを便に訪ふにく已が
かに任せんと。独りく喫立出で。彼蟠龍がうづくまるに連て付纏ふ大
蛇が念とぞ知まじける。却説小磯は其曉方より食進に漸々と病怠り
ぬるに。一日二日過行に隨ひて。速家の内をも立歩行ぶりに快く成ぬ。
片瀬垂氷も甚悦びに堪ずと親子三人
倶に足拵の方を拜奉ぬ其十月の末つかに到りて疾全く愈て。
最清々敷に成ぬるに。一日けの足拵の御神に詣奉る。願ひ
と祈らましと。片瀬等三人打連でぞ。明神の御社に詣ける。彼三人い
暫く社に額突く拜奉る御垣を立出つ麓の方に下らんとすに。

後方より声〳〵そゝ。小磯々々と呼者あり。誰あらんと顧ゝられば彼先夜稚児を伴ひ。見送りし法師成けり。彼蟠龍をけ〻も喜瀬川の里より帰り来るゆゑなりけり。三人もろ〻喜び吾家へ伴ひまゐく。先夜垂水が厚情の預りし謝禮とも述べ又小磯が疾の快く成りしを物語ゝ。此郷へ造りし酒など取出だしてもてなし饗応けるに法師悦び。先夜の事とも語りぬ。小磯が容貌を顧見てゝ悩みし容顔一入やつれ〻。窮窕たる其貌は霞中の花か雲間の月か。譬諭つべうもあらざるに従来放逸無慙の悪僧。色欲の情おさ〻りゝ動き年とも耻ぢ法衣とも厭はず。あらぬさまの生得さとり〻圓る。眼をとゞめ目ふり〻つゝも。頻りに小磯が面を顧見酒ふかべ戯るゝを。小磯も心不審く。其知らぬ様ふ會釋なるに面顰

言兼く。速黄昏ふ及びぬれば名残をしげふ暇を告ぎ訪べとて立出ぬ。片瀬は熟蟠龍が背面を見送りて。小磯ふ向ひくいひけるは是法師ふを御佛の再来るかと思ひの外。今日の様子ふ胸ふ向後ふつゝむ結ふこそ會釈なれ。親子衆共語り合ひぬ。こゝろ件の蟠龍は。數々小磯が許ふ通ひ。事ふ准へくいひよるに。小磯左右兼引ねばいろふ〻てゝ。陰〻ひとりひふ枕を砕きぬ。斯く今日とも明日とこそ。建暦二年の秋の比及夜更小磯は親子諸共ふ臥く在りしが枕方ふ小磯々々と呼ぶ声あり。小磯は不審目を見開きて。只顧ゝ昔別れ〻し亂長吾今在〻と顧ゝ。汝ふ告べき事とそ。今斯くる亂長も今は此世の人ふあらぬ其近曽打續き。左右鎌倉穏ゝ。彼北条が邪曲ゝ。忠義の武士等ふ

しだいに亡び此龍長が寸忠も空く水の泡と消失今配流の身と成る。彼所に至りて生害するに忠臣形身の垂氷が身を愈楽をば女児とする。世を忍び情育つべし。さるべき禍ひあるべん今より此末八九年の後に至らば。不意訪ひ音信壮者の誠意ふるりて。稚児の世に出んるも有ぬべし。るるに疑の事なれど宜の声に小磯も驚き夢幻にも辨へず。十年が

間の憂て流。何らに先ふ消えんと。思へを次安を消失る。暁残る有明の。燈火のごと眼ふ遊ぶ。遠寺の鐘の声なり。耳ふ残ると思ひしが。これ南柯の一夢なり。小磯と斯とるるに。覚ての後ハ夢なるべ。名残とさる跡ふ久し。さるにそ又外るるに係る夢の光景。起るに片瀬ふ話説まで。老ハ尚更覚束なりて。斯る山家ハ世の中のうち事ぞふ

給べ岐に出で鎌倉の光景を問ば知らるべしとて其日片瀬を里に出
往来の人に交まじく其知らぬ様に余所ゆゑ〳〵様子を問へば鎌倉の商
人どもの語るを聞けば介々の夏ありて左右鎌倉穩なれども此度も和田殿
の一族に滝長殿と呼ばれしの黨を結びて北条殿を計らんとせしを事
顕はして滝長殿は遂に陸奥磐瀬郡に配流る其処にて空しく成られて
と左右に聞くに世の中穩なりさえば商に業も成兼て其日
々々を過さべき様なれば結業の利を先ぞと語る世の
商賈の習ひなり片瀬に審に商人の噂を聞て立帰れば小磯に介々話
説まべ小磯も聞て打驚き偖は現々夢に正夢なりけるか
げに此世の人なれば宜ひなり〳〵と太る年に憂を凌げと宜ひ

なり〳〵折らるに彼二品を稚児に与へく後の記念とも名ん事と古歌の詞を斯
と知らぐ其節に忍び忍びくも信と心懸りの御詞と恨へなり〳〵斯
なり成べきなれば誠の信と成行〳〵神に
らるるの悲しさに別れ〳〵す其日より只顧に今日に迎への人来る翌
日に消息来るるに其節に稚児のと健に生育し光景を君に
見せまゐらせ悦びの顔を見参らせんとなりひ法に是まで十年の
憂を凌ぎ待に甲斐もなく黄泉の人と成ぬ〳〵吾児に可愛
と覚さるに悩情の吾夫と夭逝ることを理なれ片瀬も共に掻口説き
歎きなり〳〵涙を拂ひ歎くも五月に為ず君が教授に任せば垂
水を尚も愛に生長ぬを待着く吾児が行末を憑まん事を供養

るゝと慰るゝ涙なり。垂水は稚き心も斯る光景を見聞りて。さらばと童が父うへに此世に在ぬ人なるゝ童を頻く長く一度父上に見んと事と頼まゝ。思ひ出も今はなるに徒でと成行ゝと。哭沈みゝが涙を拂ひ。母の歎きを思ひやり。振顧見てやゝ母さゝ歎きの事なるゝ。迎も遠ゝぬ父うへなるまゝ。さたなりわでふ歎きゆひそ。元来武士の子と生れば童は中々哭きせね。頻く生長く長ゝく。成く誠の武士の家と興く是くある。此母さゝは祖母さゝを。楽ゝく住せやるゝせんと。意遣らまく最尚意の程を思ひやり。二人を涙を絞やるゝ。さまゝ垂水が身なるゝ。世と憚まゝ尚更に愈婦の容とゝ。憂が中ゆも稚児の。唯生長を楽ゝみに俺て月日を贈りけり。

第四回

隱家の山の井
形見の蛇丸

且説幹枝緩く巡り。遂二年余の星霜を経く。建保二年の春と成ぬ。其二月の半ばなる有けん。今日ゝも空の氣色のいと長閑なれば。足病の御社に詣んとく。片瀬は垂水を率く出けるも小磯は孤家に在く昨日織さまゝ。機を織居ゝに折ゝも彼蟠竜の訪ひ来りけまゝ。小磯を折ゝ。応合に蟠竜は門口より左見右見ゝ。微笑く。けに片瀬垂水等は何地めゝ往けん甚寂寞ゝなるに小磯は詠く。郷に東隣の家に垂水を尋ぬるとく到りぬる。速帰り給ぬべ。先坐ゝ。老母は帰ゝぬとも申まて。汝は話る

べき事のまことのひつ。小磯が膝ちかく居寄る。先頃より様々の言寄ども。
こゝろ返事をもせざるゝ。如何の恨めしおどろひつ。搔抱くんとをもへば小磯が頬よ
身を退さのふ宜のとも是事の業引ならんやうわしく。別く法師の身
在る。斯る罪深き業とか。宜ひそとのひつ。採るゝと引放ちく。逃出んと
をりけるを蟠龍裾を確と踏隨大口開く呵々と笑ひ。謙言負るる道詞
ふ。君ゝ其依の黙しして返る主月同心其と等しかるそ。衆生濟度の
成べきゝ。從来愚僧が行狀。婦と酒の両部習合。伽黎衣裳をそ
置く。五戒十戒ひましめも破る。次第の伽藍堂三界無庵と世の中の
悟りを開きし大和尚去年十月の始つゝ。彼足拵の山中ゆく。雪の寒え
小童を助けし自が善業の引合せとく爰の来く。始く逢見し其方の

顔面。悩める姿の美さ。其ゝ自墮落して其你の目の散々。降積雪の
太頃。思ひ出せば小童が。鰥ゝの形容髪の唐輪の簪を差しゝ
女子のとの宜ひ正く男子る。様てあしめと其ゝ問ひて過しが熟々と
考見れば是家の長押の懸し長刀一振。床の係の一腰の刀其の持僧の
様子の是の住則。山賊のそしるもあしく。是の先年謀反しく亡び失ゆ
梶原が。残党るゝさもゝゝ北条殿の弓を引く。滅亡るゝ和田が余
類。左ゆも右ゆも世の中を忍べる仇の末るゝ斯男子をとるく。
育つる意と疾くるもんしも僻目を兼てゝ。北条殿の命を受蜜
斯る曲者を探しん為の雲水と。形容の頭陀の造をとも公の武士ゆく。
元来光景の不審と意を著く伺しが其由緒いふくと圓る眼を

白眼く。詞り〳〵引変く。又満面に咲を含て。其ま公の掟なれど。北條殿に所由ある。此蟠竜が言扱に言ふ〳〵左右も計らるゝが不意稚き者の世に出く。不測ね栄花に逢べ〳〵と。詞に随ふべ〳〵。否〳〵言ひ詮さぐる。審に此由ゆえあば。汝等親子が来暦を欲得正さん左も右も心定めく答へせと。延引さる蟠竜が詞を聞く。此の中に小磯熟〳〵思ふ。北條殿に所由あり。兼て〳〵是法師。吾子が形容を知るゝ〳〵従来邪〳〵意以く。斯る然を敢いんとく。向後いかゝる事とか成さん。さて〳〵稚き五吉子が身の大事とて成べき跡の歎さの慮いかゝと。如何に詮さんなれば。今の身を捨ても活く置まじ悪法師婦るゝも武士の君が情を受継く。此徒を討捨その上に。自害もと〳〵定め

角せて。光景も知らぬ事果く。吾子が身に係るまゝ〳〵と思ひ究めて涙を拂ひ昭へられる吾裳裾を。頓に拂ふ〳〵ん〳〵り〳〵が彼蟠竜が頷を。確と蹴上く仰向に動と倒〳〵く距躍長押に懸〳〵長刀追取打く懸ぬ蟠竜が身を轉〳〵く起直て。逃るとん〳〵が床の間に係て〳〵刀を辛ひに其追取く。頓に引ぬき手早く受とあ打笑ひ。彼小賢き婦女と。ひ〳〵く蹴立く切結び暫時が程六會釈〳〵が切分らまく段々と庭の彼方に飛退るを。小磯も庭に續く飛下て。追さ〳〵物をと追かく。走る柏子に不意傍の井桁に袖ひき繋其外さんと氣を苛く。躊躇遶を蟠龍に入るゝ〳〵手早く太刀取直〳〵。長刀確と打落〳〵。直に傍に寄と入〳〵が小磯が腰を引抱へ其知〳〵と井の中に真逆様に墮〳〵。側に

有合ふ大石を抱えまゐりて井の中へ續けて動と投落し。成佛せよと打笑ひ心静かに側へ打捨へ〳〵長刀を取て一間ほど戻る。元の長押へ打懸て。太刀をも床へ打懸置んと。ひらり〳〵ぶ太刀も流石に武士の果なれば。いろゝ物ゝと彼劍の柄を拂ひ。ゑくわまで。何所の鍛冶か打ちゝん其鐵色の物凄さ劍の刀莖へ蟠まる龍の形を彫付たり。蟠竜從来業物の劍と嗜の癖あれば自ら号名を応〳〵る龍の形も好まけれ。ゑ〳〵と天ゝり五口ゞ為へ与へる賜物なれと。独咲〳〵く押戴き以前へ傍へ脱捨置し。法衣を取て肩へ投懸衣の下へ劍を帯し。悠々然と立出つ。口へ不動の陀羅尼を唱へ手へ一連の珠數を撮ゞり。独笑て過行し。最怖〳〵る法師なり。憐べし件の小磯。此悪僧が毒手へ係り。爰へ非命の死を

遂〳〵と知る者更へ無りけり。折〳〵も片瀬へ垂氷を引連れ徒足拵の社へ詣つ。今帰来て吾家へ入へるへ小磯の居〳〵ぐまゝ早日も頃て暮ぬ。小磯へ何處へ往けんと。独ごちて不審へ山路の埃へ塗つる。垂氷ゞ足へも灌ぎたんと。盥へ携へ井筒へ寄て。釣瓶の竿へ操下し。片瀬へ何の気へも付ず。水へ汲〳〵ゞ數度弔桶の底へ何やらん。物の障へる光景なれば甚不審へて。羊覗けば。さぞなり深くもわ〳〵ざり〳〵。山の井なれば顯々と。小磯ゞ容貌へ見へるへ打驚へて。周章ふためき。如何へせまし〳〵と猶豫不定へ折へ節黄昏の比及へて。此ところへの樵夫等。活業仕舞へて帰るを。三人連して父へ。ゝ詣へ。おのゞ隨意々何事を。大声あげて言へ。門へ過るを垂氷見て。泪へ〳〵へ走へ出人々母へ伏て給べと。呼へる声へ樵夫等へ何度

やうんと入り来る。斯る光景を見るとても。頃ふ一人ゞ井桁を傳ひ。水際ゐ下ゆき声かくるゐ。苔もめくもべ樵夫等ハ。業ゐ持る綸縄を。井桁ゐ懸く探下し。其を死骸の身ゐ纏ひ難るく和ら引揚ぐんまゞ小磯ゝ息絶て。頭ハ半血ゐ塗ゝ衣服ハ水ゐ濡そぐち色青ざゝ顔せゐ連きく係る黒髪の容もおどろくゝ。其形勢を見るゝ。親子諸共取ぎり見る情る見姿ぞと。声を限ゆゐ呼活ゝど更ゐ苔ゐ伏ざり。樵夫等種々労やく。家ゐ搬入ゝ言ける。斯浅き井ゐ墮くりゝそ。さゆど水を呑きゞけゝど。墮る拍子ゐ過ちく。項を強く打くゞ閉倒ゝと気絶ゆゝゐ片瀬いゝで猶藥よ氷ゝと嗟跎ゝも。更ゐ験る無きけり。樵夫等面を打皺ゐ。詮る見處ゐ往合ひく。心悲る事を見るりのるゐゝと各斧を振くゞ。

家踏ゐてそハ帰ゆけゝ。垂氷ハ泪ゐ哽返り。空ゝ死母ゞ死骸ゐとりつき。彼程慕ひく呼ぶりのをるゞて言をゞのくるゐねやよ母さるよ眼を開さく。せめく一言垂氷ゝと。答へく給へよ此侭ゐ黄泉ゝあゝまさゞ自も共ゐ連ゐくと歎くゐ片瀬も絶兼ゝ。折も節ゝく留守の間ゐ常汲馴ゝ竿釣瓶いるゐるゐる恠瑕ゝく。墮入くゝ山の井の浅ゝるゝね情ゐも。時節いゝゝゞ足柄の神の力も届ゝゝゝ。せめく垂氷ゞ成長く。世ゐ出る迄ハ遥けくゝも。男ゝるゝん頃まで。存命居くゞ亡君の宣ひくゝ遺言ゐ。違ゐく守る性質くゐも。叶ハね而已ゝ武士の八十年ゐ中ゝ死此母を跡ゝ殘くゝ氣強くも。黄泉の旅ゐ趣くゝるゝ。阿那ゝさけゐの小磯やと。親子死骸ゐ取ゞゞ。声を恨ゆゐ哭詑る。理を迫く柯憐ゝるゝ。さゝゞども

斯く在べきるものゝ遐りの人など訪ひ来りつ。親子を左右ゝ
さゝく。其翌の日の夕つかた詮ぎべ哭々鳥邊野の煙とたゞよ〻ひ果ぬ。
見こゝろ片瀬まいでゝ心細さも弥増まさる。倶ゝ死んとおもひしが。
今更垂氷ゞ身のうへと考見まゞ稚くく。母ゝ別まゝ孤児と。誰う〜
ろ〻く育まんと。身の薄命を幾十度おもひ廻して漸々と泪ぐらゝ
日ハ送まゞ憂を重ねく又一事其折うゝの驚ざるく。亂長君の信を。
贈ものゝ蛇丸のいふて失つまゞ親児ハ尚更うち驚きさゝぐ
探〜需まゞも更ゝ有所ハ知まゞれゞ片瀬をゞ不審く。若先日ゝ
垂氷を率く。神詣〜折柄ゝ留守を守まく在〜節。暫時の間を伺
ハまゞ身るも家ゝも暫ゞ見ゞ剣を入ゝ奪ゝまく。面目なさゝ詮まゞ。

小磯ゝ自井ゝ墮く。失〜ゝ其も計らまゞ。若さもゝ〜ゞ尚更ゝ命ゝ〜
左も右も。剣の有所を探〜得く。ゝゞ言譯ハせぎりけんさゞりなゝ理
ゞ。不知女ゝゝ〜ぎり〜ゞ慮短き吾子やとゞゝ出てゝ歎き詫ゞ垂氷を
稚きゞ〜。きゞまゞ斯く母うへの失ゝも左ゝ右ゝ亡父君の保とゝ
剣の失〜ゝ。身と捨ゝ〜事ゝ。さ〜を童ゞゝ貪てゝ何ゝをゝて
蛇丸ゞ探〜得まゞ果ゝ〜。草葉の陰の父母ゝゞ言訳ゝ〜。
よ〜偷児の取得るゝ。ゝも天地の外ゝまゞ。頻ゝ取得く参らせん斯る
意ハ足柄の神も憐とゞ〜ゞ。必ゞ哭きゝ〜。稚き孫ゝ諫ゝ〜。
老の涙や増る〜〜。さまゞる親児を只顧ゝ小磯ゞ自不意身を過く
墮入〜ゝ失ゝ〜剣の言訳ゝ。墮く吾身を棄〜ゝ。其辨ハ知〜ゞまゞ。

神々の悲しみ。彼悪法師博龍が斯ゝ成し法る所為あるべき。

然るに付ざりけ。

欽髮巨蛇話巻之二終